

---

# **秘密結社の日常的侵略行為**

山咲 祐継

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

秘密結社の日常的侵略行為

### 【Zコード】

Z5669X

### 【作者名】

山咲 祐継

### 【あらすじ】

素人な私の初めての作品です

全力は出します、しかし過度な期待はしないで欲しいです

そんなこんなで頑張つていこうと思います

あらすじ

なんでもないただの独身男が事故った、結果改造人間になっちゃつたっていう・・

そんな話

過程が気になる方はどうぞ見てみて下さい

出来れば気にならない方も一回くらい見ていて下さい

1 「トランシット・ヒューマン」（前書き）

初めての投稿になります

感想をいただけたらとても嬉しいです

それではどうぞ 行ってらっしゃいませ～

## 1『テンションに身を任せると・・・死んでしまう』

目に映る物がそれなりの速さで背後へと流れしていく  
高校時代に買つてから5年 大事に乗つてきたスクーターで山道  
を疾走する

3年前に出た田舎に帰るためだ

理由は不況の煽りをくらつた とだけ言つときます

都会で感じることの多かつた 閉鎖的な感覚から解放されたよう  
な感慨を感じる

だからだろうか

時々見かける速度規制の看板を無視してしまったのは

スピードを上げるごとに、ストレスが発散される気がして気持ち  
がいい

辺りは田舎特有の自然豊かな山々が見える

だんだんと気が大きくなり始めたころ 山道のカーブに差し掛かつた

しかし スピードは落とさない

いけると思ったんだだから逆にスピードを上げた

「ヒーハーーー！ イニシャルロ…スクーター版だああーーー！」

「……で一つタネ明かしでもしましちゃう

俺は案外バカ野郎です

どれくらいかって？ そうですねえ・・・

「ウギヤアアアアアアー！？ 調子乗りすぎたあああーー！ 僕の大バ

力野郎オオオオー！！」

飛ばしそぎてガードレールから飛び出すくらいには・・・

現在 山道の急カーブを曲がりきれず相棒（中古スクーター… □  
ーン有り）と共に落下中

眼下には鬱蒼とした森林が迫ってる・・・

「ヤバイね！」いやまじでヤバイ！—！  
人生生きてきたなかで一番ヤバイよ！？  
いやもうヤバイなんてもんじゃなくヤバアッ…………」

着地に・・・

見えなくもなことと思つ

着地？　の拍子に身体中からバキゴキッとしたイヤ～な音がした

多分折れたんだろう　いろいろと

不思議と痛みが無い代わりに体が動かない

「……っ……ガッハ！？」

声を出せりとした咳き込んでしまった

おまけに　やつままで全く無かつた痛みも一気にきた

けつこう重傷っぽい　血も出でるし

骨が肺にでも刺さつてんのかもしない　つていうか超痛い

マズイな・・・早いとこ病院に行かないと死ぬかも　超痛いし

「……っが！　…ゲホ！」

と言つて　助けを呼ぶ為　声出しに再度チャレンジ

しかし　咳き込むだけで声は出ず

あ〜 だんだん頭がぼーっとしてきた

つか今更ながら 此処つて山の中だし人通り少ない田舎じやん  
声出せても人に届く確率が絶望的なの忘れてた

もうまともに頭も働かないみたいだ

視界の端にチラチラみえるガラクタ・・・元相棒（元中古スク  
ーター）の姿が絶望に悲愴感をプラスする

「ゲホ！ ゴホッゴポッ！？」

咳きと共に大量の吐血

本格的にヤバイ

目が霞んできやがった

体が氷みたいに冷たい

それに さつきまで超痛かつたのに今は痛くない それどころか  
何も感じない

自然と一つの可能性が 頭の中をよぎる

これはアレかな？『死ぬ』ってヤツかな・・・？

普段 考える事さえ無い単語が徐々に現実味をおびる

オイオイ 死ぬのか？ いじで・・・

俺が？ 兎談だろ？

本当に・・・？

こんな所で？

死にたくねえ・・・

やっぱ 死にたくねえよ

やりたい事たくさん有るんだぜ！？

まだ初体験ビニルかキスさえしたことないだ！！

彼女が出来た事さえないんだぞ！？

嫌だ・・・こんなのは

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だイヤだイヤだイヤだ死にたくない  
死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない  
シニタクナイシニタクナイシニタクナイシニタクナイシニタクナイ  
シニタクナイ・・・！

・・・ま・・・だ

「じに、だ…ぐな、…い、…！」

俺の魂の叫び 全く声が出ていないが今の俺の全力だった

ガサツ・・・

！？

その声が聞こえたのか 自分に近づく落ち葉を踏む音が聞こえた

視界がほぼ完全に暗くなりかけているせいで そちらを確認することは出来ないが 間違いなく何かがすぐそこにいる

ガサツ・・・

人なのか熊なのか・・・

そこまで考えたところで俺の意識は完全に途切れた・・・

1 「トンショノ元氣を任せぬと……死だまゆ」（後書き）

お帰りなさいませ

これまで読んでもらえただけで十分嬉しいのですが・・・

出来れば感想が欲しいことがあります

お手数ですがどうかよろしくお願いします

次回の投稿が何時になることやら分かりませんが 次回にお会いしましょー！

ではではー！

2『生きていいたみたいで』（前書き）

2話題です

慣れるまでもまだかかりそうです

それまでお付き合いでよろしくお願いします

それでは 行っていらっしゃませ～

## 2『生きていたみたいで』

「……うん むう……まぶしつ」

顔に当たる強い光で皿が覚めた俺

いつの間にか寝ちゃってたみたいです

あゝ 隨分寝てたみたいな気がする

「んつ…」

おかしいな

首が動かん

つーか 指先の感覚さえ無いぞ

つまり全般的に体が動かないんですけど

「いーみつのは……おせか」

か・・・金縛りとか？

イヤイヤイヤ無い無い無い絶対無いね

そんなんアレだもん 非科学的つてヤツですもん

バリバリの現代っ子 言わばコンピューター世代の俺はそんなんに騙されたりしないんじゃもん

テンパリ過ぎて 何か言葉づかいとかおかしくなってる氣もする  
が・・・

とつとにかく！ 金縛りとか絶対あり得ないから

はい！ この話はもう終わり！！

冷静に 落ち着いて・・・

しつ深呼吸して

スーサースーサー・・・ゲホツゴホツ

若干・・・といつか

かなりびびりな俺です

～1分後～

大分落ち着いたぜ

少し動いてみるか

と黙つても動くのは・・・

ひひやう 皿と口だけのようだ

仕方ないので動く目を最大限に活用する

ふつ 問題無い この俺の推理力があれば今の状況を知る事など  
朝飯前だつ

ポク ポク ポク ポク チーン……

……唯一の情報源によって得られた情報から推測する

しばし黙考

・・・

俺の寝てるこれ・・・手術台じゃね?

いやいやいや わりからなんなんだよ?. どんだけだよ?.  
これは悪夢か?

まだ夢の中ってか..

・・・

つーか どつかで見た事あんぞ

これは・・・

!

「……まさか……ショック——？」

いや……『テスト』ンか？ 或いは『デル』——？

などとシリアスな風を装つて馬鹿な事を考へて居る俺

仮 ライダーはブラックとクウガが好きだった

「最近のライダーはウケ狙い過ぎてあまり『やつ』と田間めたか

！……』

！？

突如響いた大声量に びびりな俺は当然びびる

だが 謎の金縛りのおかげで 僕がびびりなのはばれてないはずだ

普通ならビックリとして手術台から転げ落ちたあげく テーブルの下までスライディングする勢いであります

謎の金縛りグッジョブ！！

ショッ〇ーのくだりとか 聞こえてないともつと嬉しいんだが・

「博士 いきなり叫ばないで下れ。」

……それと我々はシ〇ッカーではありますん

?

次に響いたのはさつきとは違つ 落ち着いた感じの女性の声・・・

じつやう死角に面たらしく

全く気付かなかつた

しかも ショッ〇ーのくだりつけひまつちつ聞こえてたみたいです

死にたくなつてた・・・

・・・死？

あつ！？

思い出した！！

なんで！？？

「俺生きてる」

## 2『生きていいたみたいでや』（後書き）

お帰りなさいませ

感想をいただけたら嬉しいです

次話も出来るだけ早く投稿できるよ、頑張ります

すみません、嘘です、まつたりいきたいです

それでは次回にお会いしましょー。

ではではーー！

3『あれ？俺つて何なのに口数少なかつたかな・・・』（前書き）

3話題です

とりあえず言い訳をさせて下さー

忙しかつたので投稿遅れました！

本つ当にすみませんでした！

違うんですあのテストのヤツが本当に面倒臭くつ

以後気をつけますんで許して欲しいです

それではどうぞ 行つてらっしゃいませー

『『あれ？ 僕ってこんなに口数少なかつたかな・・・』』

「俺生きてる」

おかしいな どうしたことだ

ペンギンの帽子かぶつたり  
生存戦略～！ って叫んだりした記憶はないんだけど

あれ・・・

つまり俺

死んでないんじゃね？

「つてことは..... 助かった.....？」

完全に死んだと思ってました

独り言がついつい漏れてしまつほど睡然としていると

「当然なのだよ！！」

という

やたら元気な返事が返ってきた

先ほど俺をびびらせた大声量と同じ声だ

不覚にもまたびびってしまった

「完成ですね」

そんな言葉と共に手術台に寝かされてる俺には見えない位置から  
大小二人の人影が出てきた

人影をよつづく観察した結果一人とも女性のようだ

おそらく先ほどの声の主達だろう

明らかに丈の長すぎる 大きめの白衣に腕を通した活発そうな少  
女と

漆黒のスーツをかつこよく着こなした 秘書っぽい大人の女性だ  
つた

「 」

白衣の少女は中学生くらいだと思つが 茶髪をツインテールにしてるせいでかなり幼く見える

そしてこちらは

「 …… 」

肩口で切り揃えられた黒髪が知的な雰囲気を漂わせる ザ・秘書  
つてカンジの人なんだが・・・

「 …… 何か? 」

あれ 何だろ? ・・・ スゲー恐い

びびり君センサーがビンビンに反応してゐるし

何より視線に寒気を感じる

超恐い

やつぱりアレか?

じるじる見てたのが気にくわなかつたってことか？

「いやあの……ああまりに綺麗だったんでつい……」

「とりあえず謝りながら  
機嫌をとる

だからそんな目で睨まないで下さい

お願ひしますから

いい加減ヤバインですよ

主に俺の涙腺が決壊的な意味で

くつ 限界が・・・近い！

などと秘書っぽい人と無言の攻防？（俺の中だけ）をやつている

「ふつふつふつ なるほど……」

何故か突然笑いだした白衣の少女

どひした

電波でも受信したか？

「のタイミングで厨二発症か？」

「博士？」

心なしか秘書っぽい人も心配したような声を出す

「なるほどな……」

まるで深く納得したかのような声で 白衣の少女が小さく呟いた

その口は羞しげに笑つてゐる

何が『なるほど』なんだ？

「私のこの美貌に魅せられたのだなーー！」

瞬間 白衣の少女が叫んだ や吠えた かな？

どちらにしろ それほど広いわけでもない部屋の中ではやめて欲しいです 耳がキーンとします

・・・

まあ あれだな どひやうり俺のお世辞に反応したらじい

お前（お子様）には言つてねえって

なんとこゝか・・・

いの娘アホっぽい

「……」

秘書っぽい人もどこか諦めたような表情してるし

あつ 目が合つた

いつもこんな感じなのだろうか  
疲れた顔をしていらっしゃるので

とりあえず大変ですねえといつ意味の視線を送つてみる

「チツ

……問題は無いようですね

舌打ちが返つてきた

余計なお世話的なカンジかな・・・

もしかしなくても俺嫌われてる?

「畏縮するのも無理はない！ 私の美しさはもはや兵器のレベルだ

からなー！」

・・・何か変なスイッチが入つたらしい

自信に満ちた笑顔で延々と自分を讃め称えている

この娘はアホの子かもしれないな

・・・マジで止まんない

お~い帰つてこ~い！

ぜんつぜん話が進んでねえ気がする・・・

3『あれ？俺つてこんなに口数少なかつたかな・・・』（後書き）

セリフって難しいですよね

いろいろ修正してたら主人公のセリフが少なくなつて驚きました

キャラの性格も大幅に変わつたり

まだまだ素人以下の自分が頑張つていきますんで

応援お願いします！

それでは！

#### 4『それでも俺は人間ですか』（前書き）

4話目投稿します

基本的に不定期更新になります(・・・・・)

何かいろいろとすみません!  
慣れるまでもう少し待っていて

まつたりいきましょう!

それではじり

#### 4『それでも俺は人間ですか』

あれから一分くらいの時間が流れましたが  
話が進まないです

何故かと言ひと・・・

『完璧過ぎる私のうんたらかんたら……  
そもそも私の美しさはどうたらうまいんだ?  
宇宙の神秘があぶらかたぶら……』

白衣の少女に全く止まる気配が無いんです

ていうか宇宙の神秘て

・・・

いやいや 違くて

今そんなん気にしてる場合じゃないじやん

今一番気にしなくてやなんのは

「…………俺 なんで生きてんの?」

これよ

俺的にこれが一番氣になる所

「こいつはいったいどういう……」

思わず口から出た疑問だつたが

意外な所から答えが返つてくる

「……研究に都合のいい“物”が落ちていたので拾つただけです  
……勘違いしないでください」

意外っちゃ意外 秘書っぽい人だった

答えが返つてくるとは思つていなかつたから独り言のつもりだつたんだが

あつ 因みに ツンデレって思つた良い子の皆へ！

絶対勘違いしちゃダメですよ～！

この人の目は本つ本当に俺の事を“物”としか見てないからね～！～

・・・悲しいけどこれって現実なのよね ていうか 俺 何か悪い事しましたかね？

何も悪い事した記憶が無いのにこの扱い 酷いと思いませんか？

あれ おかしいな？室内なのに雨が降つてやがる

ハハツ この雨 しおっぺえや

とまあ・・・ふざけるのはこれくらいにして

何か秘書っぽい人が研究とかなんとか言つてたが  
何の研究だらう？

今の俺の体が動かない状況から察するに・・・人体実験？  
いやいや恐らくただのジョーク的なものだらう

きつとそうに違ひない

・・・限りなくブラックに近い類のジョークを！ ハツハツハツ

つまりあれだ 今の状況を整理すると あの後俺は彼女達に助けられたということでいいのだらうか？

俺が森に倒れている所を彼女たちが見つける

手当て の流れかな

なるほど それなり説明がつく気がする

さつきまでの冷たい態度はただの口下手 それか照れ屋さん

そうだ

そうに違いない！ と思いたい 僕がいる

なんだ結局はいい人達じゃね？ 説を信じるぜ！・！

だとしたら礼を言わねばなるまいな

しかし 何故体が動かんのか

もしかしたら麻酔でもかけたのかもしれんな

などと考へてみると・・・

「体が動かないのは まだ機械化に馴染んでないからです」と秘書っぽい人がおっしゃつられた

・・・？ きかいか？ キカイカ？

あつ 機械化？

ふつ 何を言い出すかと思えば・・・

あんたも不治の病ちゆ一にびようの人か・・・

「お嬢ちゃん 大人をからかうのは良くないごめんなさいすみません許して下さい」

言つた瞬間ものすごい形相で睨まれた

例えるならモンスターをハンターするゲームのティ○レックスだ

超恐ええ

「信じられないだろ？ なれば見るがいい もはや私の作品となつたその体を！」

さつきまでha! ha! ha! ha! って高笑いしてた

のに

いつの間にか自己陶酔の世界から帰ってきたイタイ子がまた声高  
々に吠える

ほとんど空氣と化していたな・・・

「ポチッとな」

少女がわざとらしく口に出しながら  
何カリモコンのようなものを操作すると 自分の体の上にデカイ  
鏡がせりだしてくる

おかげで手術台に乗った自分の体が良く見える形だ

「マジか.....」

思わずこぼれたこの一言が今の俺の気持ちをすべて物語っている

鏡に映った自分を凝視する

指先の感覚なんて無い筈だ

そこには見えるのは・・・

手足の無い自分の姿!?

おまけに首から下は機械的な光沢を放つている

「『自分のおかれた状況が判りましたか?』

秘書っぽい人が何か言ってるけど ゼンゼン耳に入っこない

放心中の俺

かるうじて口からもれたのは

「うそん……」

そんな現実逃避の一言でした

ていうかこれ

やっぱ○ヨツカージャン

イーッ!

#### 4『それでも俺は人間ですか』（後書き）

キャラが私の手から離れて動きます！

全く言つ事を聞けません！

どうしたらいいの先生！？

ってな状況です

安定しねえです　はい

いや　原因は分かってるんですよ？　ひとえに私の実力不足が招いてる事態なんですよ……

話もそろそろ動きだしますので

どうぞ次も見てやつて下れー

まあ　次の投稿が何時になるのか全く分かりませんが

次回にお会いしましょう

それでは～

## 5『キャラ作りは一切の妥協も許されない』（前書き）

5話田 投稿します！

やつぱつコメディって難しいですね・・・

これから精進しようと想っています

応援してくれるヒューリティです

それではじめしゃべりについて本文に行なっておきます

## 5『キャラ作りには一切の妥協も許されない』

やあ！ 良い子の姫やー。

教えて お兄さん の時間だよーー。

まずはおのじのローナーの説明をするよー。

ローナーは最近良くあるような 姫からいの質問にお兄さんが答えるなんでものじやなく

お兄さんの質問に皆が答えるところシスステムを採用した

反面教師系 超他力本願な全く新しいローナーだよ

主にお兄さんの精神的安定に活用されるローナーやー。

良い子の姫はお兄さんの精神を守る為に全力で答えるよいひーー。  
わかったかな？

悪口とか言われちゃうとお兄さんが天井に吊るしたロープを輪っかにして遊び始めちゃうから 姫 お兄さんには優しくしてね

それではーー！

姫に質問ですー！

ドウシシテコウナッタ?

現在 僕 現実逃避中・・・

頭の中では どこかで見たことあるような子供番組が 面白おかしく陽気に歌い始めているが

視線は鏡の中のメタルボディに釘付け

それも仕方ないとと思う

日常 駐れ親しんだはずの 貧相とまではいかないまでも平均的なマイボディが ちょっと見ない間に言葉では言い表せないくらい大変な事になつてているのだから・・・

例えるならば・・・優しくていい子だつた息子が 嫁さんと離婚して2年後くらいに会つて見たら世紀末覇者みたいな不良になつていた

そんなカンジ・・・

あ 息子つて別に下ネタじゃないよ？ あっちの息子じゃないか  
ら勘違いすんな

まあ アレだ・・・

とにかく洒落にならん

変わり果てたマイボディを前に俺が言葉を無くしていくと

再び天井に格納されていく鏡  
気の抜けたような ズゥイーン という音が俺の心中とはなんと  
もかけ離れた間抜けなものに聞こえる

が それと同時に

放心していた俺も現実に引き戻される

「どうだ！ 私が自ら設計＆改造した新しい身体は！？ 勿論  
まだ完成というわけではないが 私の自信作だ！！」

そして 現実逃避から復帰したばかりの俺の耳に届いたのは やはり 白衣の少女の能天氣ボイスだった

まるで子供が自慢をするかのような声だ

身体中から『ほめて ほめて』みたいなオーラを出していく  
確かに普段の俺ならそのままの愛らしさ姿に ついつい頭を撫でくりまわしてしまっているところだつたるつ

しかし 今の俺はこの超絶能天氣なお子様を校舎裏に呼び出した  
いイジメっ子の気分だ

覚悟するがいい 僕様の黄金の右が火を吹くぜ

体が動くようになつたらね・・・

しううがないから田で不満を訴え 口で不服を伝える事にする

「なんていうか あんまり嬉しくないっていうか……（中略）…  
…正直 迷惑なんだけど」

とりあえず 延々文句を言つてやつた

（ちなみに秘書っぽい人は我関せずを貫いている）

すると、どうしたことだらうか？ わたお母でのマジックライセンティストなノリから一変

五月蠅かつた白衣の少女は急に大人しくなった

少しば反省してくれたのだらうか・・・

「……ぐすり」

・・・ぐすり？

「ぐすん……」

しまつた！ やり過ぎた！ 白衣の少女が涙目になつたる・・・

な 泣くのが！？ マズイ！ 子供のあやしかたがわからん！？

「うう……でもでも あのままだつたらビーセ死んじゃつてたわ  
けだし だから そんなに睨まなくとも……」

あれえええ！？ キヤラ変わり過ぎだろ！？ セツキまでの能天氣  
ガールは！？ そっちが素なの！？

「……ぐすつ……ふええ～」

白衣の少女が言い訳をしながら半ベソをかき始める

涙腺から滲み出た涙が零れるまで 秒読み状態だ

3

2

い「わ わかったから！ わかりましたから！… ちょっと！？  
泣くのは勘弁して！ 謝りますから！…」

俺は悪くないが 全力で謝る

さすがに女の子を泣かせてまで許さない程 鬼じやないです

・・・てゆーか

女の子を泣かすという行為に腰が退けてしまつ小心者なだけです  
けど

「」 今度から気をつけてね？」

出来るだけ優しく声を掛ける

まだ涙田ではあるが持ち直したようだ

しかし やすがに先ほどまでの元気は白衣の少女には無い

完全に落ち込んでしまったようだ・・・

その姿に擬音を付けるとすれば しゃぼーん が一番合っている  
だろうか

・・・とにかく やつと落ち着いたといつわけだ

はあ 泣きたいのは俺の方なのに・・・

しゃぼーん・・・

喉元過ぎれば熱を忘れるところの通り

熱を忘れた白衣の少女が メタルボディについての血肉兼説明  
を元気に始めた頃

俺は足り無い頭をフル回転させて 元に戻る方法を考えていた

ひととおり冷静に考えた結果 ひとつのがほを思いついた

「もとに戻す」とか出来ないのか?」

改造できるならその逆はどうなのか? つてことだ

少なくとも 僕の知る限り人体改造 それもフル改造なんて 世界最先端の技術でも出来るかどうかってところだ

つまり それだけの事をやつてのける連中なのだから 逆に元の体に戻す事も出来るはずなのだ

多分・・・

「え~カツコイイのに~

『出来るよね?』 イエスッサー!!』

このアホの子はさつきまでの出来事を 全て忘れてしまったようだから(鬼のような)笑顔の(ドスの利いた)優しい声で もう一度尋ねると 軍隊式のとても良い返事が返ってきた

別に怒つてません ちょっとイラッとしただけなんです

・・・だから そんなに青ざめた顔でガタガタ震えるんじゃない

傷つくじゃないか・・・

後に 和解した白衣の少女から聞いた話だが 僕自身に睨んでいたつむりが無くとも 僕の目はとても怖いらしく

鋭いとか眼力がある訳ではなく　例えるならば　深い闇に見初め  
られているような感覚らしい・・・

ハハツ　厨二つ

・・・それはともかく　案外早く元の体に戻れそうだな  
良かつた　良かつた

・・・

アレ　もう一人居たような気がするんだが

いつの間にか　秘書っぽい人は室内に居なくなっていた

もしかしたら　ここから見えない位置にいるのかもしれないが  
そんな気配はしない

どこか行つたんだろうか？



## 5『キャラ作りには一切の妥協も許されない』（後書き）

・・・なんですかね？

キャラが本つ当に書ひと聞きません

好き勝手に動きます・・・

どんどんストーリーが変わってこきます

すみません 訳です

何度も書つますが 私の実力不足が原因です

そんなわけで次話投稿がかなり遅くなることが なきにしもあらず・・・

とにかく がんばります

それでは 次回にお会いしましょう

## 6『馬鹿は馬鹿なり』— 生懸命馬鹿な人生歩んでるんです！ 馬鹿にしないで

6話目投稿します

いやいや 前の話から若干日数が空いてしまいました

申し訳ないです

別に時間を掛けたから その方面面白くなつてるとかは無いです

いや ホントすみません

とまあ こんな作品でも見てくださいといふ方がいるのかどうか  
分かりませんが

一段落するまでは終わりませんので ビツカお付き合こ下せ  
不備がありましたらお申し付け下さい ちやっかり直しますんで

それでは6話目です ビツカ～

6『馬鹿は馬鹿なりに一生懸命馬鹿な人生歩んでるんです！ 馬鹿にしないでく

ガショーン ガショーン

秘書っぽい人の姿が見えなくなつて数分・・・

「おおっ！ ちゃんと歩けてる！ 憎いなこれ！！」

ガショーン ガショーン

俺は今 白衣の少女と比較的良好な関係を築きつつある

ウイーン ウイーン

「すごいでしょ～ えへへへへ……は！？ 『ほん』『ほんつ！  
！ なつ何を言つ！ 当然ではないかつ！！ はつはつはつ！！』

見てのとおり この白衣の子はそれほど悪い人では無かつたようだ

キャラ作りのボロを高笑いで誤魔化す白衣の少女

本名 梨理華・リル・メリー・リルリ・リリアーヌ・カリスと言  
うらしい

最初に名前を聴いた時は ゲシュタルト崩壊を起こすくらい“り  
”という字を使いすぎだらうと思いました

おまけにハーフとのことで、名前が長いからそんなの憶えられる  
わけが・・・いやいやいや 大丈夫・・・のはず

「……ハツハツハツハ！ クックックク！ ウヒヤヒヤヒヤヒ  
ヤ！」

### ウイーン ガチャン

キャラを取り繕つ為に始めたはずの高笑いのせいでキャラ作りが  
ほこりび始めてキャラを見失いかけている白衣さん

だが話してみると なかなか話の分かる素直な子 という印象を  
受ける

「仮面ライ○、ーといつよりは…… ○ー＝－タ－つてとこかな  
？」

キャラを取り繕つのに必死な白衣さんを横目に自分の首から下  
メタルボディを再び観察してみる

それは 一昔前の変形合体ロボットみたいなガチャガチャした見  
た目ではなく 装甲と言つて余りある頑丈そうな外殻を持ちながら  
それでいて しなやかな無駄の無い無駄な造形美すら感じるメタ  
ルボディだ・・・

ちなみに サっきからガシャガシャウインウインやつてんのは機  
械の手足を付けた俺です

なんでも機巧義肢<sup>オートメイル</sup>つていうらしいです・・・

いやいや本当に梨理華・リル・リル・リ・・・リリル? リラ?

え~と・・・白衣さんは厨二が好きだなー ハツハツハツ・・・  
え? なんで名前で呼ばないのか? それはあれですよ・・・  
機関の妨害的なあれです・・・失礼な 僕が名前を忘れるなんて  
最低な事するわけ無いじゃないか

なら名前を言つてみろ?

・・・ふつ いいだろ俺の驚異的な記憶力を持つてすればそんな  
事 造作もない・・・クツ グアツ! ? 機関の妨害か! ? 白衣  
さんの名前を思い出そうとするが機関から受けた古傷が痛む! 機  
関め~未だに私の記憶を消したがっているといつことか! まあそ  
んな訳で いやー 残念だ 本当なら直ぐに思い出すのにな  
本当に残念だ~

機関つてなんだ つて?

クリスティーナよ あまり細かいことは気にするものでは無いぞ  
! ハハハハハハハ!

・・・

すんません 取り乱しました

## ガシャーン ガシャーン

・・・まあそんなわけで 元に戻れるみたいだし どうせなら今の状況を楽しむ方が良いかなと思いまして

それに 人生の中で改造人間になれるなんて体験 滅多に出来ないからね 多分

## ガキヨーン ガキヨーン

「くつくつくつ… ターミネーターか 確かにデザインは似てなくもないがな 勿論そんなものとはレベルが違うのだよ！ 何故ならば！ その体には私の創り出した全く新しい形態のエネルギーコアを採用しているからだ！！ 凡人の頭でも理解できるように話してやる良く聞くがいい！ そもそもにして 従来のコアでは アニメやマンガの様に人間型に固定した場合での エネルギーの備蓄量や動作時のパワー変換効率がかなり限られてしまう！ だがしかし！！ 私はそれら二つの問題点を解決する 画期的で天才的な方法を発明したのだ！！」

じょく白衣慢気に話す 白衣さんのこの口調はキャラ作り 時々ボロが出る

素のキャラと違い過ぎて不自然だ

だが 見かけによらずというか何と言ひつか 白衣さんはかなり頭が良さげだという事が分かった

「空間多元論を応用し作り上げた私の自信作 その名も『<sup>カオス・</sup><sup>ボット</sup>亜空間機巧』だ！！ ふつふつふつ 『亜空間機巧』が何か知りたいだろう？ 遠慮はするな！ 顔に書いてあるぞ？ 知りたいんだろうそうだろう！？ そこまで言うならば仕方ない教えてやろうではないか！！ まずはその原理からじっくり……」

発言の節々にあるイタイ台詞やら子供っぽい言葉づかいやらが気になるもの

まるで このメタルボディを造ったのが自分であるかのような言い種といい

秘書っぽい人に『博士』と呼ばれていることといい

このメタルボディは十中八九白衣さんが造ったものだろつ

少なくとも 白衣さんが俺よりは頭がよろしい事はよく分かった

しかし 白衣さん 凡人にも理解できるように話して下さるのでなかつたのですか？ 凡人の俺が全くついていけませんよ？

・・・なにはともあれ 思つたより早く元の体に戻れそうなのだ

過去は忘れてポジティブシンキング 今この時を全力で楽しもう  
と思います

「博士？ 話は済みま……」

いつの間にか部屋から消えていた秘書っぽい人が これまたいつの間にか部屋の中に現れた

「…何を……しているのですか？」

居ないと思っていた人間に死角から声をかけられれば 勿論 びびりな俺はそのスキルを余すこと無く發揮する事になる

秘書っぽい人の一言にびびり倒した俺の緊急避難行動・・・

具体的に言えば そう 目の前に居た白衣さんに抱きついた形である

ミシッ・・・

秘書っぽい人が持っていたペンのような物が軋む音がした

・・・死んだな

いやいや 落ち着け俺 誤解だ誤解を解くんだ 話せば判るさ  
人間だもん まずは歩み寄る事が大切ですよね

「違うんです これは事故 そう 不幸な事故なんですよ」

「…………」

出来るだけわざとらしい印象を与えないよう冷静に語りかける  
が ペンを粉碎した秘書っぽい人の右手がパキポキと骨を鳴らし始  
める・・・

ヤベエな もはや不機嫌オーラなんて可愛らしいものじゃねえ  
殺意の波動と化している

「…………さい」

「…………え？」

秘書っぽい人が何か呟いたようだがよく聞こえなかつた  
「…………れなさい」

「…………？」

・・・ 時が経つにつれて波動が大きく・・・

「離れなさい……」

「へ？ ……あつ」

あー・・・ そうですよね~ 分かりました まずは 白衣さん  
から離れた方が良いってことですよね

「あははっ すみませんでした~」

秘書っぽい人を刺激しないよつ そつと離れる俺

しかし そんな俺に突き刺さるのは デスビームも真つ青つてく  
らい鋭い秘書っぽい人の視線・・・

赦す気は無いことですかね~

とてつもない命の危険を感じる いつたいどうしたら良いくんだ

！ そうだつ

白衣さんなりの誤解を解くことが出来るはず

白衣さん！ 助けつ・・・あれ

「あわあわ／＼／＼／＼

田線で白衣さん助けを求めるも、それびいじゅ黙れやうだ  
だいじかひの黙れやうだ

てゆうか……完全にキャラ作りの面が外れとる

「ちよつー？ しつかりしてくれよー？ 頼むから！ 頼みます  
から！ 帰つて来ーーー！ うわっやべえ！ （ドスー） ぐぼあ！  
！？」

・・・俺の意識はそこで途切れたのだった

・・・

後日、白衣さんから聞いた話だが、意識を無くす前に響いた鈍い音は、どうやら秘書っぽい人の踵落としが炸裂した音だつたらしい

ちなみに秘書っぽい人の名前はレイリツト言ひひじい・・・  
漢字で書くと冷季だ

まあ、どうでも良いけど・・・

あれ？ 僕はいつたい・・・

なんだ？ ここ何処だよ・・・何か最近この台詞多いな

あつ ちょうどいい 人だ

あの〜 すいません ここ何処か分かりませんか？

『キヤバクラ [冥土]と黄泉』？ なんだそりゃ

つて じいちゃん！？ 何で生きてつ ああ もしかして俺死んだのか・・・？ だから冥土ってか・・・

ダジャレかよ

まあ良いや 元気だった？ はおかしいのか？ なんて言えば良いんだ？

つか 何してんだよこんなところで・・・

さつきからソレ何飲んでんの？ 毒々しいくらい真っ黒なんだけど・・・

酒ー？ ソレ酒なのー？ てゆーかあの呑んで酒ー？

マジかよ・・・俺ももういいやー？

・・・あつ 美味しいな・・・

そつこえば、あひさんと仲良くなへて喰してる、  
こるんじょ？ ケンカとかしてない？

え？ 口常茶飯事？

なんですか、仲良くしなよ

・・・

あ そりやばあひさんもキレるわ

当たり前だよ いのロロジジニが

え？ 何？ 時間？

何の？

え？ 此処にいらっしゃるタイムリッシュ？ なんだよ？

あひよ あひよと熙こじさん・・・

わかつたよ わかつたって しつこな・・・ もつ帰のよ

じゃつ またな じいちゃん

機会があつたらまた来るよぶおあー!?

「ゲはあう！」

「うわっ！？ 気がついた！？ えつえーと……なつ何か百面相してたけど……楽しい夢でも見てたのかな？」

田を開くと田衣さん的心配しつつも何故か慌てた様な声が聞こえた

ちなみに冷季さ・・・  
秘書つぽい人は白衣さんの後ろに控えてる

ヤベエよあの人・・・ だつて声に出して無いのに名前呼んだ瞬間 例の波動を感じたぜ・・・

これからも秘書っぽい人でいこう

「？」

白衣さんが首をかしげている

「……ん？　ああ　死んだ筈のじいちゃんとキヤバクラで飲む夢を見たんだ　また来るつったら五年早いでぶん殴られたけど」

あのクソジジイ　死ぬ間際に　背後霊となつてお前を見守るとか宣言してたくせに　キヤバクラ通つてやがった

生前から破天荒な年寄りだったからな

あの様子だと　ばあちゃんも苦勞してんだろう

「……へ　へ～」

白衣さん　聞こいてその反応はおかし・・・

・・・何かおかしいぞ

白衣さんと田代が合ひ度に反ひたれる

明りかに変だ

「白衣さん？」

「……サツ

まるで子供が親に隠し事をするかのような反応だ

俺が寝てる間に何かしたのか？

「……ジー 何か隠していない?」

ビクツ!

「そ そそそんなことはござい……」「

急にアワアワし始める白衣さんが 後ろに控えてる秘書っぽい人に助けを求めるような視線を送る

それに対し 秘書っぽい人は小さく会釈した後 白衣さんの前まで歩いて来ると 僕の顔を見て

「……チツ」

舌打ちをしてきた・・・

死ねば良かつたと? 理不尽過ぐる

「え エヘと……何ですか?」

理不尽な対応に納得は出来ないが 何も言えない びびりだからね

結局は相手を刺激しないよつ 下手に出てしまつゝタレ具合 び  
びりだしね

果たして 僕が誰かに強気で挑める日は来るのか・・・

「…本来なら博士から伝えられる筈でしたが 今日は私から伝えましょう…」

白衣さんのアワアワの理由かな?

割かし重要そうな雰囲気ですね

「…あなたの元の体に関係する重要な話です…」

そいつあかなり重要でいやがりますね！？

・・・えつ何？ 何か深刻なカンジっすね

口クでもない気配がパねえんですが

「……あなたの体は」

あ ちょっと待つて下さい

心の準備がまだ

「現状 すぐ元に戻すのは不可能となります……」

「…それはどういづ？」

どう聞いてもよろしくない方向に流れしていく秘書っぽい人の話に思わず口を挟むが

それを無視して

秘書つぽい人が冷静に言葉を繋げていく

「既にあなたの体は処分済みですかから」

パねえロクデモネエ・・・

## 6『馬鹿は馬鹿なり』—一生懸命馬鹿な人生歩んでるんです！ 馬鹿にしないでく

お帰りなさいませ~

読んでくださってありがとうございます

やつと白衣さんと秘書っぽい人の名前を出せました 良かったです

梨理華・リル・メリー・リルリ・リリアーヌ・カリスさんと

冷季さんです

あんまり 本編で出る機会無いかと思いませんが

一応補足しておきます

作中 白衣さんの事を名前で呼べなかつた主人公ですが 理由は  
一つ

長くて覚えられなかつたのもありますが もうひとつ 主人公が  
びびりのヘタレだからです

名前で呼んで嫌な顔されるのを無意識の内に恐れたんですね

秘書っぽい人には既に嫌な顔されてますが・・・

長々と書いてしまいました すみません

それでは まつたりペースの更新ではあります  
しつかり続けていくつもりなんで 応援とかよろしく  
更新何時になるかわかりませんが 次回にお会いしましょう  
ではでは

「…………まだ物語は始まつてゐる無い 信じられるか？ これ7話目なんだよ

7話目です

すみません だいぶ遅れました

いろいろと理由はあります

もはや言い訳はいたしません

開き直ります

後少しで現実の苦行から解放されますので 待つて下さい

それでは第7話です お粗末な出来ですが・・・

スナック感覚でどうぞ

7 「…………まだ物語は始まつてゐない 信じられるか？ これ／＼話題なんだ

秘書つぽい人によつて明かされた衝撃の（ロクテモネ）事実は俺の希望を一瞬でハツ裂きバラバラ木つ端微塵にしても飽きたらず 勢い余つて俺の中のナニかをブチッと切つた

・・・そのナニかつてのは堪忍袋の緒なわけで・・・

「なんつつづじゃ そりやーーー？」

つまりぶちギレたわけで・・・

「何かいろいろ話が違ひません！？ つてか処分済み！？ あんたらヒトの体に何しちゃつてんの！？？」

びびりな俺も怒る時は怒るんです

普段は静かな火山が時には自然災害として猛威をふるつよつて内に秘められた静かなる怒りを解き放つのだ

「本日 午後4時に焼却炉にて焼却処分を終え……」

・・・自分でもちよつと上手い事言つたかな とか思いつつ 火山噴火を彷彿とさせるよつな怒りのポーズをしてみると

全く動じずに報告を始める秘書つぽい人

人の体を燃やすという 自分に100%の非がある状況でこの冷  
静さ

もはやこの人の中で俺は『ヒト』でさえないのでかもしれない

悲しい

「ちがうよ！？ 処分の方法は聞いてないよ！？ 確かに何しち  
やつてんのとは言つたけど！！ つていうか何！？ 俺の体燃やし  
たの！？ ホント何してんですかあんたらは！？」

「……チツ」

「今舌打ちが聞こえた！？ おかしいなあ！ ゼンツゼン反省の  
色が見えねえなあんた！？」

俺の体を燃やしておきながら 全く悪びれない態度の秘書っぽい  
人・・・いや この際悪魔と呼ぼう もはや俺にはこの人が悪魔に  
しか見えん

因みにその頃 白衣さんは

「おつ 落ち着きたまえ！ 一人とも 大丈夫だから！… まずは話を聞きたまえ！！」

絶賛火山噴火中の俺を落ち着かせようと頑張っているみつだ

そのあまりに必死な姿は俺の気分を和ませ思わず“いいよいよ  
気にしないで”と言ってしまいそうになる 実際いつも俺なら  
既に赦してしまっているだろう

「だが断る!! 何故なら白衣さん 君は俺に“体は元に戻る”  
という嘘をついていたのだから!」

「だから話を聞きたまえと!」

俺はもう誰も信じない 永遠に人間不信だ

「だから話を…」

人間不信に陥った俺は彼女達から離れ 部屋の隅っこで膝を抱え  
始める

白衣さんが何か言つてるが知らん 俺はもう誰も信じないので

誰も信じない 誰も信じない 誰も信じない 誰も信じない  
信じない 信じない 信じない 信じない 信じない 信じない 信  
じな・・・

「聞いてよ!-!」

ドツ!

「ぐ、まおくう！？」

信じないスパイralに陥っていた俺に  
ビニから出したか分からぬ めちゃくちゃ重そうな鋸器を叩き  
込む白衣さん

薄々分かつてはいたが 頭だけはまだ生きている

「ぶるすだつひやー！ー？」

もはや言葉で答えない悲鳴？ のようなものを上げる俺

クリティカルヒット！

「ああー？ やつ過わたー！」

「博士 わすがです」

部屋中をのたうり回る俺を見て駆け寄る白衣さん

白衣さん 確かにやつ過ぎます それと頭に触ふりつけてしまひで下  
さい 痛いんで

・・・秘書っぽい人 もと悪魔に関しては手術台の逆光のせ

で表情などほとんど分からぬが、恐るべくほくそ笑んでゐるのだろう、そんな気がする

「へへへ！」

壮絶な痛みに頭を抱えながら白衣さんに無言の抗議、これ頭割れてもんじゃねえかな

「話を聞かないから……」

白衣さんの教育方針では、話を聞ないと鈍器で殴られるらしい  
近隣の中学校にでも導入すれば話を聞かない生徒は激減する」と  
間違いなし

実質的な生徒の数も減ること間違いないしだが・・・

「じゃあ 説明をはじめよー。」

・・・場の空氣がある程度治まつた頃に 白衣さんの声が上がる  
ちなみにクリティカルヒットの痛みは未だに治まらない

「……何の?」

黙つてるとまたクリティカルヒットが来そつなんで聞き返してみると

すると

「勿論 貴方の肉体を取り戻す方法についてです」

まるで当然のことを言つようと思える悪魔

だけど その内容は俺にとっての新たな希望だった

「方法あんのー?」

当然食いつく俺

「あるのだよー!」

それに元気良く応える白衣さん

「えつ でも不可能みたいなこと言つてなかつたっけ? ……だ  
いたい焼却処分したつてさつき……」

““すぐに元の体に戻すのは不可能”といつ意味です。完全に肉体を処分してしまった以上、新しく造るにはそれなりの予算と時間が必要ですか？」

「新しく……造る？」

「……説明しても理解出来ると思えませんが……」

「……」

失敬な・・・

どうもこの魔はいちいち俺を馬鹿にしないと気がすまないみたいだ

俺だって大学くらい出でんだからな

・・・まあ 難しい話はよけっとだけ苦手だけど

ほんのちょっとね・・・

「私が説明しよう――」

・・・はい

という訳でね 白衣さんに説明されましたよ

頭の弱い生徒（俺）のためのサルでもわかる優しい説明だつたんで その生徒（俺）にも何とか理解することが出来ましたよ

・・・いや まあ なんかね 取り乱したりした自分が恥ずかしくなりましたね

はい・・・

でも さすがにね 誰だつて体をウェルダン通り越して消し炭にされたら しょうがない反応だとは思いますよ

人間としては

今は 改造人間ですが

では白衣さんから受けた説明を説明いたしましょう

最初 白衣さんはヒトゲノムがどうとか もはや日本語かどうかさえ分からぬ言葉を使っていたが

とりあえず 簡単に言えば

新しい身体を造ることは案外簡単らしいです ええ

なんか 髮の毛一本の細胞からでも染色体を取り出して特殊な薬

品に浸けて培養すると ATP だか PTA だかっていう染色体の DNA がどうのこうの 僕のクローリンがどうたらこうたらとか言ってたけど

良くわかんね

まあ 何とかなるってことはわかった

ただ 今はその為の資金が無いんだとか

どうすんねーん

とか言つたら殺される気がしたんで黙つてたら

「資金が無くなつたのはあなたを改造したせいですから 力してくださいますよね」

といつのは悪魔・・・もとい秘書っぽい人の弁だ

・・・いろいろ言いたい事はある

勝手にあんたらがやつたんじやね？ とか

恐いから言わないけどね

「はあ…… 分かりましたよ それで？ 僕に何をせる気ですか  
？ 多分この メタルボディ 体じや 面接の段階で落とされますよ？ ろくにコン  
ビーのバイトも出来ないと思いますぜ？ それともヒーローショー  
のバイトですか？ マスクさえ着ければ衣装要らないし あれ 天

職じゃね？」

「ふつ…… 考え方がセコいな これだから凡人は…… だが発想は悪くないぞ その体を持つてすれば作り物のヒーローショーンじ田じやない 本物のヒーローになることだって出来るのだよ」

・・・あ うん そつなんだ

また白衣さんの悪い病気だらう じついつ時は流すに限るな

・・・誰もが通る道とは言え 厨二もここまで悪化すると大変だ将来イタイ大人になりかねない ・・厨二とはかくも恐ろしいものなのだ

何故にそこまで詳しいのかって? 何を隠そう 僕もつい最近厨二から足を洗つことが出来たのだ

いやお恥ずかしい

だが最早 僕が厨二などと云う素面なら赤面もの 穴があつたら入りたくなるような言動をとる事はありえない

「それで実際のところ その“お仕事”とやらは何なんですか?」

白衣さんのが! ha! ha! ha! とアメリカンな高笑いをしてる内に話を進める事にする

「はい……貴方に手伝つて頂く仕事は 簡単に言つてしまえば世界平和の為の活動です……」「世界平和？」

秘書っぽい人の漠然とした説明に思わず聞き返すが・・・

なぜだろ？・・・世界平和ほど平和的な響きのある言葉は無はずなのに とてもなく嫌な予感がするのは

なぜだろ？・・・

この人の言動から 一々口クでもない気配（俺にとつて）が漂うのは・・・

「世界平和といつ崇高な使命を持った 我々自身の手によつて世界を統治する……」

その答えは秘書っぽい人の次の言葉ではつきりすることになつた。

「所謂 世界征服です」

・・・ばーべりん?

7 「…………まだ物語は始まつてゐる無い 信じられるか？ これへ話題なんだけ

お帰りなさいませ〜

今回はじめて見るようにキャラ崩壊が激しい回となつております 物語を強引にでも進めてこいつとした結果です

何かもうホントすんません

これからも精進しますので お心の広い方々はまた見てやって下さい

それでは 次回の投稿が何時になるかわかりませんが また会いましょう

ではでは

8『シリアルムードにゲッソリ』（前書き）

8話目です

すみません とても遅れました

そのわりに内容に自信は・・・

とにかく見てやつて下さる

それでほの語りです！

## 8『シリアルスムード』ゲッソリ

「世界征服です」

・・・

「…はえ？」

どうも 僕です

すみません へんな声が出ました

でも それは仕方ない事だと思います

だつて 秘書っぽい人の言葉は予想の斜め上から消える魔球を投げ込んだのに 完璧なタイミングで打ち返されたくらい 逆に予想外だったのだから・・・

だつて世界征服だぜ？ 世界征服

そんなん 変な声くらい出るだろ？

『はえ？』 や『ふえ？』 の一つや二つくらいに出るわ

世界征服なんだもの・・・

みつお

・・・まあ とにかくだ秘書っぽい人の言つた言葉は俺には全く理解できなかつた というより[冗談にしか思えなかつた

だから俺は呆けたように何のアクションもとれなかつた

しかし そこは秘書っぽい人 そんな俺の様子を見ても 構わず

話を続ける

「我々は 最終目標に世界平和を掲げています しかし その為には皆の中心に立ち 世界をリードする正しき指導者の存在は不可欠です」

一呼吸置いて 更に続ける

「我々が目指すのは、その指導者というポジションに立ち、世界から戦争などという大きな悲しみを無くす事です」

まるで新手の宗教のような言い回しだが、印象としてはテロリストに近い

さらに秘書っぽい人は、世界征服の必要性やらなんやら、何かと物騒きわまりない話を延々と熱く語り始める

曰く

『……良いですか？　世界には我々以外にも世界征服をもくろむ不埒者がいて……』

・・・

『……世界には未だに多くの問題が残っています。それは何故か？　国のトップ……つまり、政府が腐りきっているからです！　だからこそ指導者として我々が……』

・・・

『……今！　世界は求めているのです……！　正しき指導者を！　誇り有る革命者を！　強き英雄を！　ならば今こそ我々が立つべきなのです！！　我々の戦う意味は……』

・・・

・・・終わらない

秘書つぽい人が熱い語りを始めてから そこそこ時間が経つてゐる  
気もするが いい加減長いです

高校時代の朝礼で校長からの無駄に長い演説を聞かされてる気分だ

興味ない話ほど長く感じるんだよね

とまあ 秘書つぽい人の話を右から左に聞き流しながらいろいろ  
と考えてみる

世界征服には 秘書つぽい人が熱くなる何かがあるらしい

仕方がないので秘書つぽい人の隣で暇そうにしてる白衣さんに簡  
潔な説明を求める

「つまり 我々の目的の為に世界征服をするから協力したまえ  
といふ事だよ」

まあ 簡潔だけども

そんなこと出来る訳無いでしょうよ

実現不可能に決まってるじゃまいか まったく

「IJJのテクノロジーを使えば簡単だと思わないかい?」

「……てくのひじー?」

「科学技術の事だよ?」

「ああ なるほど… つて いやバカつ そのくらい分かつて  
から 科学技術でしょ? 科学技術 あれでしょ? テクが科学で  
ノロジーが技術つていうあれっぽいやつだよね? 最初から分か  
つてたよ ははは……」

「…そこから分かつてなかつたんだ?」

白衣さんにため息をつかれた

「あ～もう! そりゃなくて そのIJJ血慢のテク…テク…テク  
ニシャン? 「テクノロジーの事?」 そうそれ! それはいつたい  
どの程度なのかつてところを聞きたいだけだから」

これ以上 頭のレベルが露呈しないように話を変えた 手遅れな  
気もするけど

「……」

無言で指差す白衣さん その先には ・・・俺?

「……サツ」

自分の背後を振り返つてみる しかし それっぽい物はなによつ  
に見える

といふことは ・・・

「まさかー……ステルス迷彩だとも」「違う……えり  
・・・違つよつだ

「何でちょっと残念そつなのか分からぬけど 私が指さしてゐ  
るのは“それ”だよ

白衣さんの視線と指の先にほこりっぽい ・・・

「つて 僕やないかー」

某髭男爵のノリ まだたまに見るよね

「白衣さん？ 僕にはそのエクスター 「テクノロジー」 それなんて無い……」

途中まで言つて気づいた

「俺 今ロクデナシ 「テクノロジー」 の塊じゅん

口クでもねえ

完全に忘れてたわ

「そつ その体は私達が持つテクノロジーのすいを結集した最高傑作なのだよ!! その性能の高さは君が一番分かっているはずだ  
よー」

白衣さんのテンションが上がり始めた

手をグーパーしてみる

・・・確かに全くと言つていよいほどの違和感が無い それどころか  
触った感覚や温度まで感じるし 世間一般に知られてるようなスペ  
イシー 「テクノロジー」 とは性能が違うようだ

「テクノロジーって言ひ過ぎでゲシュタルト崩壊し出したよ」  
つていうか今心の声を読まれた気が、「氣のせいだよ」 そつか  
氣のせいか

「……そのエクトプラズマー」「テクノロジーだよ」 原形の面影  
がないよー? まさか わざとー? 「それが凄いってのは分かった

そろそろ話を進めよつ

「絶対わざとだよね!」

白衣さんが何やら叫んでいる 何かあったのだろうか

「でもさ それだけで世界征服なんて出来なくない? もうとこ  
う 政治的なものとかあるわけじゃん?」

我ながらナイスな質問をしたと思つ

「……テクノロジーもまともに憶えられない君の口から政治的な  
んて言葉が出るなんて驚きだよ …… やっぱり わざとだったのか  
な……」

「わざとっ、えつ、なにが？」

あれ？ 何か怒ってる？

「……はあ もつじこよ 君の疑問に答えておいつ しかし その為には確認をとつておく必要があるのだよ」

「えつ？ 何？」

「……先にそんな体にしておいてこんなことをいつのもおかしな話なんだけど」

「えーと どしたの？ いきなり改まって」

「……君は 私達の仲間になりたい……？」

突然 白衣さんの口調が暗い影をおびたような印象をうけるものにかわる  
表情は無いがどことなく辛しきだ

「……これから先の話は私達の組織にとつて正に肝とも言つべき

ものなのだよ……今までの話もそうだが、あまり部外者に話して良いものでも無いんだよ」

つまり、ここから先は仲間にしか話せないって事か

つていうか、何をそんなにシリアスっぽい感じになってるんだろう？

白衣さんは、今までのイメージが崩れるくらい真面目に喋っている

キャラ作りしていた時の白衣さんとも、素の白衣さんとも違う

「私がこれから君に求める答えがとても卑怯だという事は分かってるよ。選択肢なんて無いってこと。だけど、選んで欲しい、後悔をしないよ！」

強い責任感をその日に宿した白衣さんが其処には居た

「……」

なんだろう、辛そうだ

「私達の仲間になれば、いつかは体を取り戻すことも出来るだろう……しかし、断るというのなら、その体は返してもいい……つまり、心苦しきが君には死んでもいいことになるのだよ」

だが断る

ああ いや、「めん嘘」ふざけたる氣は無かつた

「でも俺は シリアスっぽい場面が極端に嫌いだからつー・・・

「白衣さん『じめん』話が唐突過ぎてついていけなかつたりします」

「……私達は 言つなれば“悪の秘密結社”だよ……聞こえの良い理想なんて掲げてるけど 結局は今の平和を乱す“ただの悪者”に過ぎない……」

白衣さんが異様に低いトーンで話し出した

「冷李君の言葉を借りるなら 研究に都合が良かつたから拾つただけの君は 正直…… もう用済みなんだ」

さらに 白衣さんは続ける

「……だから最後に 仲間として世界征服に手を貸すか……」「こで 死ぬかを選んで欲しい……」

白衣さん 最後は言い切る前に俯いてしまった

「あ～ とりあえず 僕がその問い合わせる前に 一つ質問に答

えて欲しいんだ

「……なにかな？」

白衣わらはず暗い声の白衣さん 傾いたまま反応する

何か恐いんだけど

「ひやくこしゃん… 白衣さんは何で俺を助けたの？」

白衣さんの暗い雰囲気に圧されて若干噛んでしまった

「……」

白衣の白衣さん

「わつき秘書っぽい人が『資金が無くなつた』って言つてたの  
思い出したんだ…… そんなに余裕の無い状態だつたのに俺みた  
いなただの人間を助けたのはどういう事なのか気になっちゃつてさ

白衣さんの反応を伺う様に話しかける

「……どうしても必要な研究があつて『資金を全部使つてまで？』

「……」

白衣の途中で割り込む 白衣さんが嘘を言つてると想つたからだ

「 分だけど 必要な研究つてのは嘘だよね? だつて こんなに  
凄い物が作れるなら侵略兵器なんて完全なロボットを造つた方が良  
いはずだもん 例えば ガ○ダムみたいなね? なのに入間として  
の自我を持った改造人間なんて造る必要が無い」

白衣さんの表情が泣き出しそうに少しづつ歪んでいく

……いや イジメてるわけではけして……

でも 必要以上に悪ぶつてる白衣さんの態度が気になる

「 つ…… そんなの気まぐれだよ! そんなことより! 私の質問  
に答えてよ! -?」

声を張り上げる白衣さん 顔は下を向いたままだ

「 仲間になるか! 死ぬか! 早く選んで!」

白衣さんの フー フー といつ肩で息をする音がやたら大きく  
聞こえる

「俺は」

答えは既に決まつてゐる

「仲間になるよ

これしかない

「本当に良いんですか?」

いつの間にか演説を終わらせていた秘書っぽい人が聞いてくる

「当たり前ですよ……白衣さんは俺を助けただけなんだから」

今　俺の（都合の良い）頭の中にはこんなストーリーが（都合良く）広がっている

ある日　世界平和という大望をもつて世界征服を団論む白衣さんの前に　事故にあつて瀕死の俺が現れた

傷は深く現代の医療技術ではとても治せない

正義感の強い白衣さんは瀕死の俺を助ける為に　秘書っぽい人とコジコジと貯めていた侵略資金を全てつき込んでしまった

必死の処置のおかげで俺はどつにかこうに生きる希望を得るもの 改造人間という微妙な宿命を背負ってしまったわけだ

「そして 白衣さんはいろんな責任を感じた結果 俺にせめても の選択の自由をくれたんでしょう？」

全部都合の良い俺の頭が作り出した妄想 でもその妄想は全部が 全部間違ってる訳では無いだろう

なぜかそんな不思議な確信がある

「つ……そ んなこ と ない」

それでも否定する白衣さん

自分のやつた事が自己満足でしかないからこそ それが分かつて いるからこそ 白衣さんは 責任を感じて“悪役”を演じた “能 天氣なマジドサイエンティスト”を演じた

そういう事だらう

「だつて わたしは き君を……」

しゃくつ上げる声のせいで 下向いても白衣さんが泣いてるの が分かる

「ありがと、白衣さん。もう強がる必要は無いよ。俺を助けてくれたんだから、白衣さんに責任は無いよ」

中腰になつて白衣さんと田線を合わせる。白衣さんがゆっくりと顔を上げ、その顔が見えるようになる

やつぱり泣いてた

「白衣さんに悪役は向いてないよ。優しいもん。白衣さんは」

そういうながら、白衣さんの肩に力は入れないようにそっと手を添えて、笑いかける

女の子の涙は苦手なのだ。早く泣き止んで欲しいといつ願いを込めての笑顔だつたのだが

「うう……えぐつ……ふうえええええんーー！」

予想に反してマジ泣きし出す白衣さん

緊張の糸が切れたとでも言ひよつて、余計に大泣きを始めてしまつた

「……これは、予想外」

何とか泣き止んでもらおうと試みるもののが効果無し

オロオロする俺

「秘書っぽい人 ヘルプ！！」

「……誰が秘書っぽい人ですか」

秘書っぽい人に助けを求めるが 助ける気がない

クソッ 孤立無援か！

「あわわわっ……頼むから泣き止んでくれよー 白衣さん（  
泣）」

超オロオロする俺であった・・・

「グスッ……ヒック……」

やつと白衣さんが泣き止み始めた（？）頃

「お… 落ち着いたでゲソか… 白衣さん」

今の俺に言葉を当てはめるならゲッソリがぴったりでゲソ

変顔 物真似 だじゅれ 一発芸 H口詩吟 自虐 物ボケ et

c

白衣さんを泣き止ませる手段を粗方試してゲソ

語尾がおかしくなるくらいには頑張ったでゲソ・・・

・・・すみません 戻します

この体に体力という概念があるのか知らんが 少なくとも精神的なナニかがすり減った気はする・・・

とてつもなく疲れた・・・

「……うん もう大丈夫だよ ズズツ」

鼻水を吸い込みながらこちらを窺う白衣さん 涙で赤くなつた目  
が痛々しい

「そり…… 良かつた…… 本当に良かったでゲッソリ……」

ああ 進化してしまった・・・

∞『シコアスムード』(後編)

お帰りなさい

今回はいろいろ試行錯誤していたら何故か長くなってしましましたが・・・

どうでした?

話を進める為に頑張つたりこつなカンジになってしまった

「メティよりシリアスの方が書きやすい気がする

感想とかいただけると嬉しいのですが

あと 誤字脱字の報告もして下されると助かります

あつたつのんびり投稿ですがしつかり続けるつもりですーー

次回に会いましょうーー

ではではーー

9『新キャラの口調に聞き覚えがあるのか? やつが……』(前書き)

9話題です

いやー 何だか前回の投稿から時間空いたやいましたね

無駄に男らしく 言い訳とかはいたしません!

これから精進してこまおー!

因みに今回新キャラとか出しますが まだいろいろ未定です  
んじゃまあ そんな訳で

9話題です ゆづやー!

## 9『新キャラの口調で聞き覚えがあるのか？ やつか……』

どもども皆様最近めっきり寒くなつてきましたねえ  
雪でも降るんじやねえかつて中いかがお過いしてじょつか

皆様の心のサンドバッグ俺です

あつ「冗談ですからマジで殴りに来ないでくださいね

今俺メタルボディなんであまり殴つたりすんのはお勧めできません

あれ？ 誰と話してんだ俺・・・

そんなカンジに田の前の事象から田を背ける為 軽い現実逃避的な思考をしている俺

最近現実から逃げたくなることが多い気がします

とりあえず現在俺の田の前で起きている事象に関しては後々触れていいと思います

といつ訳で 今いるといひま

「オペレーションルームだよー」

らしいです

せつそれまでの部屋に比べれば、二倍へ三倍へ広い部屋に白衣さんの声が軽く反響する

部屋を見回し、どこかで見たことがあるな、とこう感想を四つ言い

とつあえずなぜここにいるのかとこう話をしてもいいと黙つ

といつても簡単な話で、先程までの手術台的なもののある部屋では仲間になつた俺に改めて詳しい話をするのに問題があるとのことで話しやすい部屋があるからちょっと面かせや口うみみたいなカンジである

実際に簡単

そして現在白衣さん曰くのオペレーションルームなる広い部屋に案内されたわけだ

まあ、案内されたといつか手術台の部屋の唯一の扉を開けたらこじだつたといつかぱつと見宇宙世紀でジョンから木馬と呼ばれた白ベースの中みたいな所である

「Jの部屋の設計者は例のロボットアニメの視聴者だったのだろうか？」

本来ブラ○トさんが座る位置にイスが無かつたり窓の代わりに田んぼの大なスクリーンが前面にあつたりと所々違があるようだが・・・

いやまあ・・・そんなことはどうだって良いのだ

冒頭で俺が現実逃避をしてた理由

俺にとって今一番の問題は田の前にあるのだから・・・

「白衣さん白衣さん メタルボディの調子がすこぶる悪いみたいだ 見えちゃいけないものが見えるんだけど……」

正面に見えるそれを凝視しながら不調を訴える

「？ その体は脳に直接的にも間接的にも干渉なんてしないはずだよ？」

「いや 故障だよこれは絶対故障俺には分かる」

「いやいや だから故障じゃないって」

「いやいやいや絶つつ対故障だね！ ……人が半透明で浮いてるんだよ！？ 絶対ありえないもの！ そんなん絶対ヤバいやツだもの！ 絶対見えちゃいけないものだもの！！」

俺の視線を一身に受けるもの

肩にかかる程度の青い髪 パツチリと大きな田に青い瞳 スレンダーな体には女性的な凹凸はあまり無いものの 透き通るような・つていうか透きとおつてゐる田の肌

そう・・・それはまさしく女の幽れ

『ジヤッジ 申告します 貴方の体を診断した結果 故障と見受けられる問題は存在しませんでした』

・・・えつ？ 嘶つた？

そんな馬鹿な・・・喋る幽靈なんていふのか！？

田の前の現実に驚愕していて反応の無い俺に続けて口を開く女の幽靈

『ジヤッジ 訂正します 貴方の言つ“見えちゃいけないもの”が私を指しているのなら それは体の不備が原因ではありませんよって 故障しているのは頭の方であると推測されます』

「え？ ああ うん……なるほど や 待つて あれ？」

田の前に半透明の幽靈？ がいる間に 突然喋り出すといった事態に酷くパニクる俺（何だかバカにされた氣もある）

「……ふしゅ～（訳が分からずショートした）」

『ジャッジ 質問します 彼が例の“改造人間1号”なのですか  
ドクター梨理華？』

「うん そうだよ」

リアルに頭から煙を出して思考停止状態の俺

そんな俺を放って話が進む

『ジャッジ 続けて質問です 何故彼は頭から煙を出してくるの  
でしょうか？ やはり頭の故障が酷いのでしょうか？』

堂々と馬鹿にされた 幽靈に

「問題無いから気にしなくて良いよ それに後でしつかり紹介す  
る」

『ジャッジ 了解です』

青髪青田の幽靈は軽く会釈した後

『ジャッジ 報告します 先程外部モニターとのリンクが可能に  
なつました』

と白衣さんに告げた

「ひょうびいモーター開いてくれるかな？ 彼にこうこうと教えなきやいけないんだよ」

『ジャッジ 続けて了解です』

俺の頭は未だに煙を吹き続けていて軽くぼや騒ぎだが

「とりあえず白衣さん達はこの幽靈？ を問題視してはいなこいつだつまつこの幽靈に害は無いのだらつか？」

いや騙されるな 幽靈とはこの世に未練を残したが故に具現化したもの・・・長い間現世にいる幽靈は悪靈と化してしまはず（愛読書ブ〇ーチより） つまり結果的にはこの世に良い幽靈などいないはずだ いや そもそも幽靈なんて非科学的な物は存在しないんじゃないか？ そうだ間違いない 幽靈なんてこの世に存在しない・・・あれ？ でもこの世に存在しないんならあの世には居るのか？ つていうかあの世なんて有るのか？ いや 待て待て待て おかしこそ どうしてこうなった？ 元々何の話だつたっけ？ あつ幽靈がどうのって話だつて？ つまり白衣さん達が問題無く接しているところとまでは いやいや やこで騙され……（以下ループ

結論 白衣さんと女の幽靈は友達っぽい

俺は白衣さんと友達であるからして  
友達の友達はやっぱり友達って事で

「つとこつ訳で幽靈さん これからよろしくーーー。」

害の無い幽霊は怖くない　害の無い幽霊は良い幽霊　良い笑顔（若干青いが）で右手を差し出す（ガクブルだが）俺

敬意（恐怖）を込めて　さん付けをする

対する幽靈さんは 気持ち怪訝な顔で

『ジャッジ 訂正します 私は“幽靈さん”ではありませんが』

と言つてた

人種？ やら種族？ やらを超えた友達？ が出来た瞬間である

9 「新キャラの口調に聞き覚えが有るのか? やつが……」（後書き）

お帰りなさいませ

新キャラ出しました これまた扱いにくそつな

前の3人でやった言ひ方と聴かねーのに

新キャラ増やす前にストーリー進めろって

すいません 独り言です

やつぱりあれですかね? キャラにはモデルとかいた方が良かつたりしますかね?

そういうの全く考えないで書き始めちゃったから 見切り発車感がパねえです

そんなこんなでグダグダと進んでいきます!

次の投稿が何時になるのか全く予想出来ませんが  
次回にお会いしましょ~

でまだまー！

10『改造人間の俺に人権ってありますか?』(前書き)

10話題です。

最近、本当に寒いですねえ。

太陽にはもう少し頑張つてもういたいところです。

まあ、季節によつては有給休暇でもとつて、ゆくへうして欲しくなる時もありますけど。

いつも寒いと指がかじかんで執筆がやりにくいけれど。

嘘です。すいません。

前に投稿してからちよつと口をあけすぎました。

でもまあ、のんびり生きましょつよ。急ぐと転んだり事故つたりラブコメつたりしてしまいますよ。

そんなこんなで10話題です。ビデオ見てこつて下をこ。

10『改造人間の俺に人権ってありますか?』

『ジャッジ 操作を始めます』

そう言つと幽靈さんはモニターの方を向いて直立したまま黙りこんでしまつた。

部屋が薄暗くなつていぐ。内心ビクビクしながらどうしたのかと思つていると、『ブウン』という低い音がモニターの方から響いた。

「ぬおつー?」

同時に明るい光がモニター方向から部屋を照らす。

見てみると今まで真っ暗だったモニターの画面が、なにやら英文を出ししているではないか。まぶしつ。あの、もつちよい光抑えてくれない? ああ、どうも。

「おお……」

思わず感嘆の声がもれてしまった。

何かよく分からぬが映画館級の大画面モニターが動き始めた事に単純な感動を覚えてしまつたのだ。

「じゃあ頼むのだよ」

白衣さんが幽靈さんに何かを指示する。

『ジャッジ 了解しました』

白衣さんと幽霊さんが短いやり取りをするべく、もう一度『ブウン』という音が室内に響いた。

さつきまでモニターに映し出されていた解読不能の英文が消え、

次に表示されたのは

「……うげつ」

日本地図だ。

学校に通った記憶のある方なら誰しも一度は見た事のある日本地図。当然俺だつて見た事はある。

小学・中学・高校と、古しめられ続けた強敵だつた。

そもそも興味のカケラも無い俺に都道府県を覚えるなんて無理に決まつている。

テストではレッドポイントとか普通だつたな。今でも見ると吐き気がする。はつきり言おうと思ひ、日本と言わば地図と名のつぐものは大つ嫌いです。

「そりなのだよ 無にほまずこれを見て欲しいんだよ」

そりとは知らず、白衣さんがパチンと指を鳴らして幽霊さんに指示を出す。

『ジャッジ』

それを受けた幽霊さんが返事をする。またモニターの画面を見たまま直立不動になる幽霊さん。

モニターに映し出された日本地図にポチポチと赤い点が表示され始める。うつぶ。日本地図を視界に入れると吐き気がする。気をまぎらわせなければ。何かないか……何か。

あれ？ そういえば「まさらだけど幽霊さん、リモコンとか使って無いみたいだけどどうやってモニターの操作してんの？」

「これが何か分かるかな？」

リモコン無くとも幽霊なりのくらい簡単なのだろうか？ ポルターガイスト？ 流石幽靈だぜつと、幽霊さんについてのたわいもない疑問に意識をまぎらわせつつ、日本地図に全体的に散りばめられた赤い点を見てみる。

「うつふ……何って ゲホッ 言われてもなあ ガハツ…ゼニゼヒ…！」

鼻先に二二二二クと十字架を突きつけられた吸血鬼並みに瀕死な状態で応答する。

ざつと数えただけで 2 30 個以上はある赤い点。  
それが数えるのが面倒なくらい日本中に散らばっている。

しばし黙考。

「これはまさか！ 伝説の古代文明“アトランティス”の造り出した「違います」えー」

全部言ひきらない内に割り込まれてしまつた。犯人は秘書っぽい人だ。いきなりどうしましたか？ 今まで空氣だつたから寂しかつたんですか？

ガシツ（アイアンクローラーの音）

「貴方は馬鹿ですか？いや馬鹿ですね」「えつ ちょっと何で 暴力反対いだだだだだだつ」黙つてろ馬鹿

この人の暴力は照れ隠し的なアレですか？まさかのツンデレ？  
萌えるわ〜（笑）

メキメキッ！！（指が食い込む音）

「あれ何だこの力！？あ痛だだだだだだつ！まるで万力のように俺の頭蓋が碎かれて痛ででででででつ！」

今回で確信が持てた。秘書っぽい人は俺の心を読んでいるに違いない。人権侵害の域を越えている。

アイアンクローフをかけられて頭をメキメキ言わせている（現在進行形）俺を、白衣さんは「ふう やれやれだぜっ」みたいな顔とジエスチャーで見ていた。そんな白衣さんにヘルプの視線を送る。

しかし、何を勘違いしたのか、

「仕方がないなあ！ まったく 分からぬみたいだから私が教えてあげるのだよ！よく聞きたまえよ！」

変に高いテンションで説明し出した。あつ、やばい。視界がぼやけてきた・・・

「ふつふつふつふつ まずこの世界に世界征服を狙う組織が我々以外にも複数存在していると話したのを憶えていいかい？ その数は君が考えていいよりも多いんだよ」

そういうえば頭の良い人は他人の知らないような事を教えたりするのが好きだつて、たしかじいちゃん言つてたなあ。あと他人の話を

聴かないとも言つてた。ああ、じいちゃんが呼んでる気がする。

「　の中でも日本には特に集中しているのだよ！　つまり　聞いてる？」「　もうムリ、やばい、死ぬ、助けて。最後の力を振り絞つて右手を延ばす俺。

「……つまり！　日本全体にあるこの赤い点は地球侵略を狙う我々以外の組織」　状況を見て一瞬考えた後、見なかつた事にしたらしい。ゴギヤツ（秘書っぽい人の手が何かを碎いた音）

「いわゆる　敵なのだよ」

ビーッ！　ビーッ！　

白衣さんが言い終わるとほぼ同時にけたたましい電子音が鳴り響く。モニターには『WARNING!!』の文字がでかでかと出ている。

「これはアラート…？　どうしました…？」

突然鳴り響いたアラートの原因を幽靈さんに尋ねる少し焦った力ンジの秘書っぽい人、アイアンクローは継続中。ぶらーん（今の俺の状態）

『ジャッジ　報告します　警戒していた例の敵対組織にこれまでに無い明確な動きがありました　現在は航空機で編隊を組みつつ移動中　東京に向けて移動中　恐らく都市攻撃級の侵略作戦を仕掛ける

つもりのようですね』

幽靈さんが相変わらずの調子で淡々と答える。

『ジャッジ 映像出ます』

モニターが切り替わり日本地図の代わりにヘリコプターを映し出す。ヘリコプターと言つても頭に『軍 用』の文字が着くような馬鹿デカイヤツだ。映画とかで見たような黒光りする銃も見える。

「遂に動き出しましたね “独立変革大隊”」

秘書っぽい人の呟きが聞こえると同時に、大型ヘリの横つ腹に書かれている“独立変革大隊”という文字がモニターに映された。

アイアンクロードが解かれ、自由になつたものの、1日に頭へ受けるダメージの量が既に限界を越えていため膝がガツクガクの俺。

『ジャッジ “独立変革大隊” 略称“独立変革大隊” 我々と同じように最近発足したばかりの新参です』

またまた感情の起伏が無い淡々とした声で喋り出す幽靈さん。誰に話しているのだろうか？ 白衣さん達は知つてゐるっぽい顔してゐる（多分）。あれつ！？ これはもしかして もしかすると もしかしたりして俺の為に説明していくぞ いらっしゃいますのでしようか！？

やべえよ、この人（幽靈）すげー良い人（幽靈）だよつ！ 気遣いが出来るとても良い人（幽靈）だよ！

と、多少回復した俺は久しぶりに人間らしい気遣いをされた事に涙を流さんばかりの感動を覚えていた。

『半年前に“過激派”を名乗った組織で、その目的は我々同様“世界征服”を掲げています。しかし恐らく根の目的は全く異なるものであるところがD.r.・梨理華の考え方です』

「痛ててつ “根の目的”って つまり白衣さんの言つてた世界平和つてヤツのこと?」

『ジャッジ そのとおりです 我々の“世界征服”的先には“世界平和”という未来図に繋がっています つまり全世界を掌握し小さな争いさえ無くす事 それがいわゆる“我々の”根の目的です しかし彼ら』

今まで無表情で淡々とした幽霊さんの顔が、少し嫌悪に染まった気がした。

『“独立変革大隊”が“世界征服”を目指す根の目的は「その過程から得られる“利益”そのものなのだよ』

幽霊さんの言葉を盗つたのは白衣さんだ。

「別におかしい事は無いのだよ ただでさえ数多いそれぞれの組織の目的が 同じである方がおかしい訳だし」

言いながら何かを考えている様に顎に手を当てたり指をクルクル回したりする白衣さん。不意にポンッと手を叩く音が響く。

「クックックク よしそ これはほんとうにいいのかもしれないのだよ!』

なんだか実に愉しげなセリフが聞こえてくるが、モニターの画面

が逆光になつていて真つ黒な影しか見えない。

「は 白衣さん いつたい何がちょうどいいかもしないんでしょ  
うか？」

逆光で全身真つ黒な影の白衣さんは妙に迫力があって、若干びび  
りながら訊いてみる。

「クツハツハツハツ 勿論決まつているではないか！」

白衣さんの真つ黒な影がゆっくりと俺に向けて指をつき出す。激  
しく嫌な予感がする。

「ちょうどいいから君に」

あつ、今一瞬笑つてんのが見えた。

「初仕事をしてもらひうんだよー。」

激しく嫌な予感が当たる気がします。

10『改造人間の俺に人権ってありますか?』(後書き)

お帰りなさいませ~。

こんなカンジに仕上がりました。

それじゃまた次回の投稿で会いましょう。

寒つ。

11『一般人を書いてると、どんどんキャラが濃くなつてこく』（前書き）

11話田です。

新年初投稿になります。

つつても間が開きましたね。申し訳ないです。

では11話田です。どうぞ。

『11『一般人を書いてると、どんどんキャラが濃くなつていく』

その日は朝から騒がしかつた。よくよく考えてみればそれは、何かの予兆だったのかもしない。つていつかストレートに原因だつたのだろ?。

ああ、なんであるな事に……

とある都市

～とある民間人の視点～

「あ～つ　まだ寝てたつ！」

日曜日の早朝、とても心地の良い眠りの国を楽しんでいた私は、現実の世界からの刺客により文字通り叩き起された。

「お父さん　朝だよつー・起きうつー・ー!」

ドッ

「グハツー?」

鳩尾あたりに感じる重みに、軽く顔をしかめながらそこを見やると

「起きるーっ！」

娘が全力で飛び跳ねていた。

ドスッ

「グフツ！ 分かったつ 分かったからつ」

「とうひ

ズドッ

「グエツ！ 起きるからつ！ つてか もう起きたからつーー！」

私の鳩尾はトランポリンじゃないつ

「早く顔洗つて準備してつてお母さん言つてたよつ 約束したんだ  
からねつ 遊園地つ」

とてつもなく上機嫌そうな娘は、それだけ言って部屋を出でいつた。今年六年生になつた娘ではあるが、行動から幼さが未だ抜けない。

「つふあ～あ

欠伸が出る。

今日は日曜日現在時間7：30。健康な高校生男子であつても余裕で眠りの中にいるだろ？。

当然私もいつもだつたらこの口のこの時間は、布団の中で毒リンゴを食べた白雪姫並みに堂々と惰眠を貪つてゐるはずなのだ。では何故私がこの日のこんな時間に叩き起こされなくてはならなかつたのか

ヒントは先程の娘のセリフの中にある

「ん～つ 何で今日に限つて晴れんだよ」

伸びをしながら空を確認してみる。空は快晴の青空だ。雲一つ無い。ちょっとした奇跡だ。

というのもこの国の季節的な物で、雨が続いていたからこの時期に晴れば珍しいのだ。

週末は仕事が無いことと、家で、口ロロロする予定だつたのだが、娘の学校もちよつと大型連休に差し掛かっていたらしい。

娘曰く

「暇つ どつか連れてけ！」

いや、実際こんなカンジで言わされましたね。敬意とかゼロです。

その後1時間ほど脅は…いや 説得が続き、娘が金属バットを素

振りし始めた所で私が折れたのだ。

娘は間違いなく母親似であろう。

そんな訳で、日曜日“もし晴れたら”とこつ条件のもと遊園地行きを承諾したのだ。

はあ、なんで今日に限つて……と、もう一度未練がましくため息をついた所で洗面台に向かうのだった。

現在9：00くらい。奇跡的に雲一つ無い快晴の下、私は家族と遊園地に来てしまっています。

「お父さん 次アレ乗りたいっ」

娘が指差す先にあるのは

(きやああああああーー)

けたたましい悲鳴を追想曲のように奏でる拷問器具、……もとい、この遊園地で一番人気の絶叫マシーンだ。

螺旋状のコースを上がったり下がったり飛んだり跳ねたり、重力

だつたり遠心力だつたりをいろいろと無視したアトラクション。その名も“あつちへGO!!”。

ビニヘルゴルセルの氣だ。

(うわあああああああつ……)

「……バス」

「え～っ」

「え～っじやねえよ　お前わっせから絶叫系しか乗つてねえじやねえか　そろそろ限界だわ」

何を隠さう娘は極度の絶叫マシーンジャンキーなのだ……

「限界？　私はぜんぜん平気だよつ？」

「俺がだよつ」

しかも、必ず私が道連れにされる。

「絶叫系ばっかハシゴじやがつて　その上あんなヤバそうなのに乗るつもりか？」

(きやああああつ……)

「見てみる大の男が恥も外聞も無く泣き喚いてんじやねえか

(た　助けてくれーーつ……)

可哀相に……

「あんなもんに乗つてみろ　今に泣き叫ぶ事になるぞ……俺が」とにかく自分が既に限界を迎えている事を必死に伝えて見る。ちなみにお母さん…もとい私の妻も絶叫系ジャンキーであり、そのレベルは娘を軽く凌駕する。あの人に付き合わされたら身心がもたない。例え娘でも。

何だかんだ言つてあの人と比べれば娘など可愛いものでしかない。

所謂、圧倒的に格が違うのだ。

「ふう　まあ確かにちょっと疲れたから　アレに乗る前に休憩つあそこに売ってるフランクフルトでも食べよつか」

少しば私は気持ちが伝わったようだ。これがあの人なら首根っこ掴まれて強制参加だつただろう。實に恐ろしい。

「でも乗る事は決定なんだな……まあ休めるのは素直に有り難いが

「……」

「十本くらい」

「吐くぞ　流石に……」

「大丈夫　大丈……つ」

フランクフルトの屋台に走つて行こうとした娘が途中で立ち止ま

る。

「何だ どうした？ 大丈夫か？」

娘の様子がおかしい事に気づき近づいてみる。

「……アレ」

私の声に固まっていた娘が反応する。視線はビリヤリ固定されているらしい。

「アレ？ ……ん？」

娘の目線で視線をたどってみると、するとそこには確かに少し異様な物があった。

「ヘリ？」

それも一般的なただのヘリコプターでは無い。いつかテレビで見た事がある軍用ヘリよりも大きな機体が黒く塗装され、圧倒的な威圧感を醸し出している。

「自衛隊……じゃないな 黒いカラーリングなんて見た事無い……  
……つーかこっち来てね？」

黒いヘリがだんだんと近づいて、その大きさに改めて驚く。

「お お父さんっ……」

娘が私の服の端を掴む。珍しく恐がっているようだ。絶叫系のア

トラクションを笑顔でハシ「あるよつなヤツが、こんな可憐ひこ  
反応を見せるのは本つ当に珍しい。……

「恐いの? (笑)」

「……ギチッ (怒)」

一瞬でカブミッシュンが完成した。

(バラバラバラバラバラバラ…)

そんなこんなやつてる内にプロペラの音がめりやくちや近づいて  
いた。プロペラによつて発生する突風が凄まじい。正に田と鼻の先  
だ。へりはフランクフルト屋台の真上あたりで空中停止してこる。

「『独十変十隊』?」

黒いぐりの側面にテカテカとペイントされた『独十変十隊』の文  
字。聞き覚えも見覚えもさつぱり無い。

「お父さんつ 逃げよいつ」

つらつらと考へてこると、娘が私の腕を引っ張つてきた。

「あ ああ そつだなつ とにかく離れよつか……」

一田考えるのを止め、とりあえず厄介な事になる前にその場を離  
れようとくつに背を向ける。

(グシャー…)

背を向けた方向から何かが潰されるような、とてつもない破壊音が聞こえてきた。

「何だ！？」

驚いて振り返る私達。そこには、フランクフルトの屋台を踏み潰した機械みたいな恐竜のような怪物……所謂

「……メ○ルギアー？」

版権とか著作権とか諸々を含めて危険そうな怪物がいた。

（グルルルルルッ……）

いろいろな意味で危険な雰囲気を醸し出しているソレから、動物独特のうなり声のような音が聞こえてくる。全長にして約5メートルのこれは、どうやら生き物らしい。

（ズシャツ…）

そんな音と共にメ○ルギアのような怪物が一步踏み出す。若干水音を含んだような音に目を向けると、潰されたフランクフルト屋台から赤い水溜まりが広がっていた。……多分ケチャップだ。

「ひつ 怪獣つ 化物つ お母さんつ」

お化け屋敷でさえ動じない娘が動搖しまくっている。

娘の中では怪獣や化物とお母さんは同列の生き物なのだろうか。私もまったく同意見だが……お母さんに聽かれたらお仕置き確定だな。

(ズシャツ)

また一步近づいて来た。しかし腰が抜けてしまったのか、娘はその場に座り込んだまま動こうとしない。

(ズシャツ)

娘を抱えて逃げようと判断するが

「ツー！」

10メートルはあつたはずの距離は、デカイ怪物の歩幅によって既に逃げる事は出来ない距離にまで詰められてしまっていた。

(グルルルルルル……)

1メートルも離れていない所で、怪物が私達を見下ろしている。咄嗟に娘を庇う様に怪物の前に立つたが、何の意味も無いのでは無いだろうか。

勝算もなにも無くただ父親として、とか浅いこと考えての行動だ。マジ恐え。出来れば逃げ出したいが、守らなければならぬヤツが直ぐ後ろにいる。

「だ 大丈夫だ娘よ コイツは俺が引き付けておく も前は早くお母さんの所に行きなさい」

背後に庇つた娘を振り返りながらなるべく平静に話しかける。足はガックガク震えている、ばれていなか不安だ。

「はつ えつ でも……つ」

(キシャアアアアアーーー)

怪物が吼え、私の胴回り程はある太い脚が大きく振りかぶられる。

「心配すんな 早く行け！！」

「お父さん……つ」

覚悟を決めた私の言葉に後押しされるように、娘が駆け出す。

肩越しに娘を見送る。アイツは逃げ足だけは速いから、逃げきれるだろうと思う。そう願つ。

まあそれも、私がこの怪物をどれだけ引き付けておけるかで変わつてくるのだろうが。

(ブウンー)

その音と共に丸太のような脚が迫る。

「グフツー？」

咄嗟に両腕を前に出し、後ろに全力で跳ぶ。マンガでよく見る回避方法を試してみたが、そんな器用な事一般人の私に出来るはずもなく失敗。ヒューン、ドサッ、ゴロゴロゴロと数メートルを転がり

無様に倒れる結果になつた。

「カハツ！ ゲホツ！？ ギ…ギツ」

どうにか生きているようだが、全身が痛くて息が出来ない。両腕の感覚も無い。もしかしたら怪物に蹴られた時にスプラッタな事になつたのかもしれないが、どちらにしろもう動けない。万事休すつてヤツだ。

（グルルルルル……）

直ぐそこに怪物の足が見える。トドメを刺す氣らしい。有り難い。

「グツ……時間稼ぎ ゲホツ 成功だ 馬鹿野郎つ」

それだけ言って意識が遠のいていく。怪物の脚が私を踏み潰さんと迫るのを最後に私は目を閉じた。

「すげー や白衣さん！ メ○ルギアじゃね コレー！？」

私のシリアルスな覚悟を揺るがすような、どこまでも呑気な声が聴こえてきた。



## 1-1『一般人を書いてると、どんどんキャラが濃くなつてこぐ』（後書き）

お帰りなさいませ〜。

「」の小説はなんだかんだでぐだぐだと続いていきます。

投稿遅くても心配しないで下さい。終わるまで続けますんで。

ではまたの機会にお会いしましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5669x/>

---

秘密結社の日常的侵略行為

2012年1月14日15時45分発行